

殿死去の届け并に若も第次眞殿跡目相續の願ひ且其身第次眞殿と叔甥の件を以て後見する旨幕府の老眼へ上申て萬事首尾好くすませ頓て飯田町の邸へ同岡部家の分家中より  
 吉次郎といふ養子をむかへてこれに家と譲り岡部加賀守と名乗せ吾身は奥方妾小兒とも引  
 つれて山王の宗家へ乘込み萬事の後見をど爲しにけるされば故美濃守殿の末亡人お熊の方  
 にい尙二十にも足らず花ならばさかりの年齢にありながら綠の黒髮としげもなく切すて  
 名をも妙立院と改めて若殿第次良とともに西の御殿に移り給ひゆる程に長憲ぬしの愛妾  
 花里の殿の宗家の後見に立給ひしより一入多ひと得て權威を振ひとりしが其後又懷妊て此  
 度の男子を産みければ長憲ぬしの後覺へいよく目出度く又岡部家の家臣の中にも長憲ぬ  
 しの歎心を得て立身せん事を望む小人原のその寵に娘よの古語を事として密に花里に詔諭  
 ふ者多ければ益々我意に募りて傍若無人の舉動のみ多かりき花里の所生兒  
 の名を祿三曾殿と呼びぬ爰に又奥御殿の賄方を勤むる石田音次といふ者  
 あり元來便佞利口の小人にて花里の引力を得て立身を望み常に詔諭ひとり

しが一日人無き時を伺ひて花里の部家  
 に來り聲を低めて花里に聞くやう拙者  
 愚癡を以て考うるに今度御出生の若  
 君祿三郎様を御宗家の跡目相續に成さ  
 る・時は則様も今の妙立院様の如く假  
 令大殿様に御萬一の事あると生涯御  
 安樂の御身とこそなり給ふべけれ若  
 その御心おはさば拙者ふがてもあくまで  
 力をつくし申すべしとする代り望と遂げ給ふ其時にわ  
 然るべく御登庸をと言出けるが花里は豫てその下心な  
 きにしもあらねば音次の言を聞いて片頬に笑を含みそれ  
 一段の事なれど吾子祿三郎と立るとは先殿の一子弟久郎めを除かねば事行は

